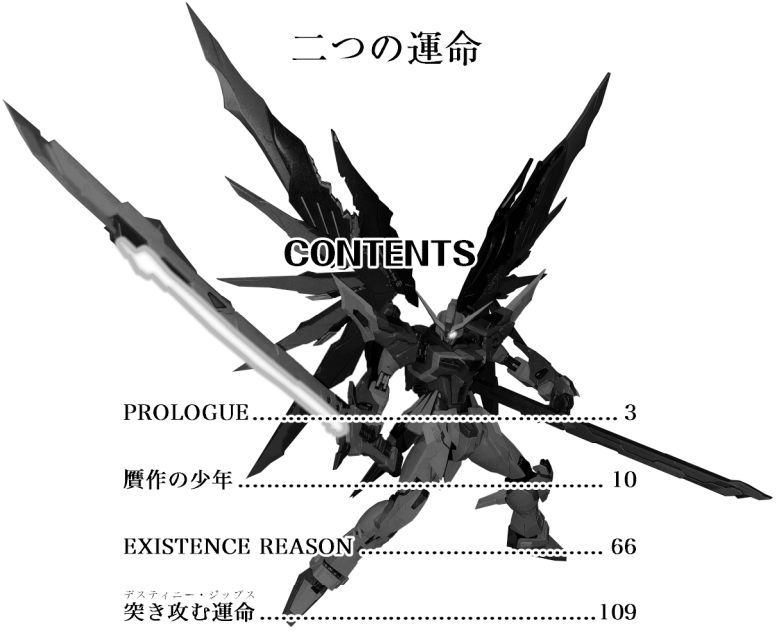
運命の赤い瞳 Special Edition Ⅳ

二つの運命



CONTENTS

PROLOGUE 3

贋作の少年 10

EXISTENCE REASON 66

突き攻む運命（デスティニー・ジップス） 109

EPILOGUE 解き放たれし衝動 195

登場人物紹介

東風谷早苗

風祝を営む 17 歳の少女。半人半神の現人神であり、神の力を引き出して様々な『奇跡』を操ることができる。霧の湖で〝シグサリー〟に拉致され、囚われの身となる。

シン・アスカ

〝幻想郷〟に迷い込んだザフト軍の少年兵士。元の世界に帰るため日々奔走する毎日を送る。遺伝子調整を施されたコーディネイターであり、S.E.E.D.の因子を有している。現在の搭乗機は紫紺の機体、〝デスティニーインパルスガンダム SS〟。

河城にとり

河童のエンジニア。仲間との河童とともに〝デスティニー〟、〝インパルス〟を修復するほどの技術力を持つ童顔の少女。

博麗霊夢

博麗神社の巫女を務める少女。18 歳。妖怪退治を営み、幻想郷内で起きた様々な異変を解決してきた。早苗とはライバル関係で、シンに対しては親身に接する。左利き。

レイ（コンダクター）

過去の記憶を失くした金髪の少年。どこか儚げで、高貴な印象をもつ。怪我のショックで記憶を取り戻しつつある模様。搭乗機は白銀の装甲を持つ〝プロヴィデンスザク・ファントム〟。

霍青娥

己の欲に忠実な仙人の女性。常に人前で妖しい笑みを浮かべている。自らの求める『力』の一つとしてレイに期待を寄せる。

魂魄妖夢

半人半霊の一族の末裔である少女。長刀〝楼観剣〟と短刀〝白楼剣〟の二振りを扱う剣士であり、白玉楼の庭師。

比那名居天子

天界の一角に存在する〝神樹の園〟でレイと青娥が出会った天人。万物を斬り裂くことができる宝剣〝緋想の剣〟の持ち主。

PROLOGUE

時とともに世界は変わっていく。変わらない世界などありはしない。

それは死後の世界――〝幻想郷〟の冥界でも通じる概念だ。

亡霊、西行寺幽々子は冥界に広がるすみれ色の空を眺めながらお茶をすすっていた。幽々子は生命の輪廻の輪から解き放たれた亡霊の姫だ。今日も冥界のすみれ色の空を眺めては一息つく。飽きるほど目にしてきた光景だ。

ふと、背後に気配を感じた。命ある妖怪のものであり、すぐにその持ち主を直感で悟る。

「あら。きたのね」

幽々子は振り返らず、枯山水を眺めながら唄うようにつぶやいた。すると庭の先から声が返ってきた。甲高いものでありながら、落ち着きを秘めた声。これまでにも何百回、何千回も聞いた、耳に馴染みきった友の声。

「ええ、幽々子。お望み通り招かれたわ」

気配の先には、陽の光を遮る洋傘を差し、白と紫の道士服をまとった少女がそこにいた。頭にかぶっているナイトキャップからは詰め込みきれないほどの量を持った艶やかな金髪が揺れている。彼女の持つ澄んだ瞳はわずかに細められており、その慣れ親しんだ神秘的な雰囲気に対して幽々子は思わず口元を緩めてしまった。

「悪いわね。わざわざこんな朝早くから――紫」
幽々子は目の前にいる女――八雲紫に対し、扇子で口元を隠しながら白々しく呼びかけた。彼女は幽々子の親友であり、これまでに幾度も〝幻想郷〟の季節の移り変わりを目にしてきたスキマ妖怪だ。彼女との縁も今年で何年目だろうか。そして、彼女をこの屋敷、白玉楼に招いたのも何回目だろうか。
「冗談。貴方のお茶の誘いとあらば、断る理由がないわよ。……けど、驚いたわね。まさかうちの猫に言付けを頼むなんて。そんなに私に会いたかったの」
やれやれ、と。わずかに呆れをにじませた態度でそう紫は口にする。
「ええ、それはもう。それに紫、だいたい家に行ってももぬけの殻じゃない。貴方を追って〝幻想郷〟の果てから果てまで飛び回るよりも、藍か橙ちゃんにお願いした方が手っ取り早くって」
「私はヒマじゃないのよ。こうみえて」
「どうかしら。いつも厄介事を霊夢に押し付けて、暇を楽しんでると思うんだけど、私」
「式神の藍の手や橙の手を借りたって賄えない事があるくらいには忙しいつもりよ。それに、厄介事を……異変を解決するのは、博麗の巫女たる霊夢の役目。この世界で起きたどんな異変でも、ね」
紫が口にした藍とは八雲藍と名付けた紫の式神だ。〝幻想郷〟最強クラスの妖怪の一種、九

尾の妖狐を媒体とした従者であり、そして橙はその藍の式神である化け猫妖怪だ。彼女たち三人は常に一緒にいるわけではないようだが、まるで家族のように仲がいいことは知っている。

そして、紫は霊夢と関わりが深い。紫と霊夢の関係を一言で表すなら――そう、仕事仲間のようなものだ。

二人はともに〝幻想郷〟の存続に必要不可欠な〝博麗大結界〟の管理者である。実際、紫は忙しいらしい。その理由は先代の博麗の巫女が請け負っていた仕事を今は紫自身が掛け持っているからのようだ。『今代の巫女』は、博麗の巫女になってからそれほど時が経っていない――とも紫から聞いた。

幽々子（ゆゆこ）は先代の巫女を噂程度にしか知らない。それまで博麗の巫女というのは、人々から単に『巫女』とだけ呼ばれて、〝幻想郷〟の維持に力を尽くしてきた人間、としか伝わっていない。大変そうだな、と思う。

紫は直接霊夢を助けることはあまりしないが、様々なことに手を貸しているのは事実だ。これまで起きた異変でも助言を与えて、解決に導いている。ときには東風谷早苗や霧雨魔理沙と言った霊夢以外の人間が異変におもむくことはあれど、もとを辿ればだいたい紫が霊夢たちを解決へと導いている。

そうやって紫は巫女とともに人間と妖怪の架け橋にさせたのだ。かつてこの〝幻想郷〟でも人と妖怪の間に絶え間ない争いがあったが、今は数多くの人間と妖怪が手を取り合って平和を

享受している世界となった。

そのような安寧を見据えて紫が霊夢を動かしているのなら、まさしく〝幻想郷〟の平和は紫の手のひらの中なのかもしれない。少なくとも幽々子はそう思っていた。

「となり、座ってもいいかしら？」

紫は穏やかな笑みを浮かべてそういった後、洋傘を閉じて右手を軽く一閃させた。すると、紫の手が過ぎ去った空間が突如、ジッパーを開くように『割れ』だした。その奥に広がるのはスキマと呼ばれる紫のみが自由に扱える四次元空間だ。その暗闇の世界に洋傘を放り込んだあとでスキマを閉じた彼女は幽々子の隣へ腰を滑らせた。

この能力こそ、紫がスキマ妖怪と呼ばれる所以であり、『境界を操る程度の能力』の一端だ。物理的な境界を引くことだけならず、その気になれば概念の境界さえも操れる。過去には夢と現実の境界を操って一時的に〝幻想郷〟の次元を歪めたりや、地上と月の距離を操って行き来したこともあるらしい。

相変わらず便利な能力ね——感心したあとで白玉楼の奥から二つの人魂が出てきた。白玉楼に住む新参の使用人幽霊だ。今日は確か、オルガとクロトと言う幽霊だったか。彼らは急須と紫用の湯のみを持って慌ただしくいた。まだ幽霊の体にもここの仕事にも慣れていないらしい。幽々子は不慣れでいるその姿に「十分よ、ありがとね」と礼を言って帰したあとで、紫の湯のみにお茶を入れてあげた。今日は抹茶だ。漂う香りが心地いい。

「いただくわ」
二人で同じように枯山水とすみれ色の空を眺めながら、一息つく。
今朝はとても静かだ。可愛い妖夢が青娥とレイを追って飛び出してから、慌ただしい声が聞こえてこない。レイがいた頃は二人で楽しそうに稽古をしていたのだが、こうも静かすぎると寂しいものだ。剣術の稽古は苦手だが、妖夢とレイはもはや日常の光景として欠かせない要素であることに気付く。
……だからこそ、また二人にはこの屋敷に戻ってきてほしい。
「どう？　いい加減、貴方も関わって終わらせたほうが良いんじゃないかしら」
「――なんのことかしら？」
「異変よ。私もある程度調べてるわ。騒がしい烏天狗からも無理やり聞き出したしね」
「あら、あの新聞記者ね。強引なことするじゃない」
幽々子は朗らかにそう言うと、紫は愉快そうに目を細めてきた。すでに詳しいことは自称〝幻想郷〟イチの敏腕新聞記者、射命丸文から、弾幕で聞き出している。ここ最近現界で話題になっているモビルスーツ、そしてテロリスト。それを紫が放っておくとは思えない。
「……いつまで静観を決め込むの？　もう半年以上も経っているのよ。『賢者』である貴方がアレにたいして知らぬ存ぜぬを通せるはずがない……何が狙いなの」
ここに紫を呼んだのは他でもない。彼女は旧き時代から今の〝幻想郷〟を形作ってきた『賢

者』と称される大妖怪の一人であり、どんな人間よりも、どんな妖怪よりも〝幻想郷〟を愛している少女だ。

だから――レイや妖夢の心を傷つけるような〝外の世界〟からの異物の存在を、紫が見過ごしているとは思えなかった。

「聞かせてちょうだい。貴方の考えを。貴方があえてまだ傍観を決め込んでいるその意味を」

幽々子はすでに青娥からも、レイが駆る〝ザク〟についても、近頃起きている異変の噂についても聞いていた。機械人形の存在についても理解している。

紫は〝幻想郷〟を愛している。

その結果、彼女がレイを殺すことに繋がる可能性もまた否定できない。

「わかっているわ。心配しないで、幽々子」

「紫」

「私は貴方の敵になるつもりはない。この楽園の滅びを望むつもりもない。……いずれ、時が来るわ。彼ら異なる時間を生きた人間をなぜ私たち賢者の妖怪が排さないのか、分かる時が」

紫は湯のみからぷっくりとした唇を離して、遠くを眺めながらそうつぶやいた。

「私には未来が視えている。私が手を下さずとも、争いの火種がついえる未来が。それをもたらすのは貴方のレイと……もう一人」

「里で噂の男の子かしら？」

「ええ、シン・アスカ。そして、レイ。彼らはこの世界にきっと変化をもたらしてくれる。その可能性を私は信じたい。あの子たちはこの〝幻想郷〟の未来を照らす、夜明けの光となるのだから」

それ以上の追及を幽々子はやめた。彼女は自分よりずっと聡明で、誰よりも〝幻想郷〟を愛している。その彼女が心配ないと断言しているのだ。

――わたしにできることは、レイと妖夢を信じてあげることだけのようね。

しかし、レイが戦いから逃れられないことが悲しい。そこから引き離そうとしている妖夢もまた巻き込まれることも。

せめて、自分はこの白玉楼で彼らの帰るべき家になってあげよう。この白玉楼で、帰りを待ち続けてあげよう。

幽々子は空の向こう側で異変に立ち向かう少年少女たちの無事を願う。それが自分にできるふさわしいことだと信じながら。